

高校生をもつ保護者の皆さまへ

地方の 国公立大 の魅力

概要編

世界が注目!
個性的な研究!

丁寧な
個別就活サポート!

学生数
÷
教員数

勉強・研究に
集中できる!

自然が
近い!

学生が優秀!

生活費
が安い!

親元を
離れて
自立!

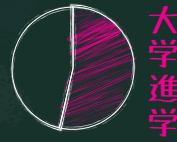
施設・設備
が充実!

まじめな学生が
多い!

学費が安い!

地域社会に
根差している!

令和元年度の学校基本調査によれば、
全国の「大学(学部)進学率」は**53.7%**で、
高校卒業者の半数以上が大学へ進学している状況です。



大学進学

全国に大学は全部で786大学、
うち国立大学は82(大学院大学を含めると86)大学、公立大学は93大学です。
つまり「**約5大学に1大学**」が**国公立大学**という割合です。
また、大学に入学した新入生総数は約63万人、うち国立大学入学者は約10万人、
公立大学入学者は約3万人で、「**約5人に1人**」が**国公立大生**という割合です。

旧帝国大学(東大・京大・東北大・北大・九大・阪大・名大)や
都市部の公立総合大学はご存じかもしれません。
全国各地にある**地方の国公立大学**は、地元以外であり地名度はありません。
しかし、全国の国公立大学がその地域に根差した「教育」「研究」「社会貢献」に取り組み、
日本だけではなく**世界から注目を集める個性的な教育・研究**を行っています。
ご存じない「地方の国公立大学」の魅力をご理解いただいた上で、進学先をご検討ください。



1 金銭面



国公立大学 = 「学費が安い」という点は
ご存じだと思いますが、その他のコストを
想定されていますか？

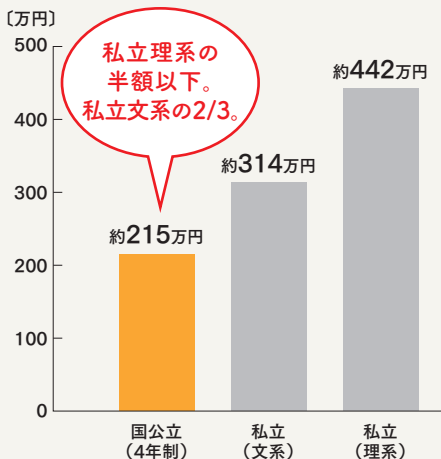


地方ならばお金も時間もかかりにくい！

1 安価な学費

国公立大学は、文理問わずどの大学・学部・学科でも、授業料はほぼ同額。国公立大学の年間授業料は約54万円、4年間で約215万円です。一方、私立大学の授業料は文系4年間で約314万円、理系4年間で約442万円(施設設備費は除く。文部科学省「平成30年度私立大学入学者に係る初年度納付金平均額調査結果」より)です。

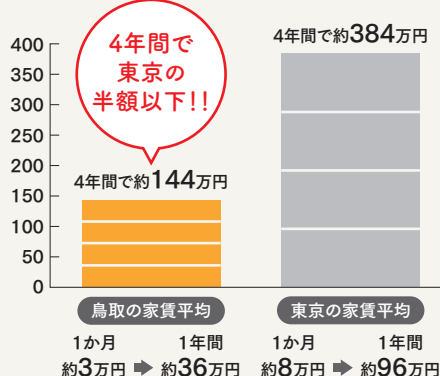
● 4年間の授業料の比較



2 安価な家賃相場

「ひとり暮らしの学生が多い」のが、地方の国公立大学の特徴です。生活費で最もお金がかかるのは「家賃」ですが、地方の場合、家賃相場は格安です。ワンルームのアパート・マンション(1か月)の家賃は都市部で6~10万円ですが、地方では2~5万円です。例えば、鳥取大学(鳥取キャンパス周辺)では平均3.2万円です。地方の4年間の家賃代(3万円×12か月×4年=144万円)は、都市部(8万円×12か月×4年=384万円)に比べ、約240万円安いです。

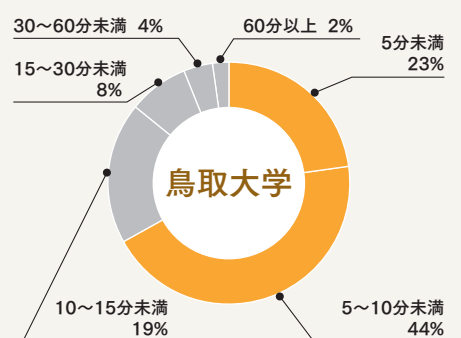
● 地方と都市部の1か月家賃の違いによる家賃総額



3 通学時間と通学費用

地方の国公立大学のひとり暮らし学生の多くが、大学周辺に居住しています。地方では通学にかかる「膨大な時間(通学時間)」と「高額なお金(通学代)」を必要としません。長時間の満員電車に揺られ通学で疲弊するのは都市部だけです。地方の学生は「徒歩」「自転車」「バス」で「散歩」感覚で通学可能です。「実家通学」のメリットは勿論ありますが、「自宅→自転車→最寄駅→私鉄→JR→バス→大学」で往復の通学に2~4時間もかかり、高額な通学定期代がかかるようであれば、地方でひとり暮らしをする方が、時間もお金も無駄がありません。

● 鳥取大学生の通学時間(片道)



2 生活面



「ひとり暮らし」は、単に生活力を身につけるだけではなく、社会で求められる力を修得できることをご存じですか？



大学進学を機に、親離れ・子離れを！

1 自立による主体性

「ひとり暮らし」では、衣・食・住すべてを自分で対処しなくてはなりません。「食事」「買物」「洗濯」「掃除」「ゴミ捨て」等、すべて自分でこなす必要があります。ひとり暮らしのはじめは誰しも苦労しますが、1か月ほど経過すれば親に頼らなくても生活できるようになります。親から自立し、自分の意思をもって主体的に行動していくことを、ひとり暮らしを通じて学びます。自立して主体的に行動することは、大学でも社会でも求められる非常に重要な能力です。

2 自己管理能力

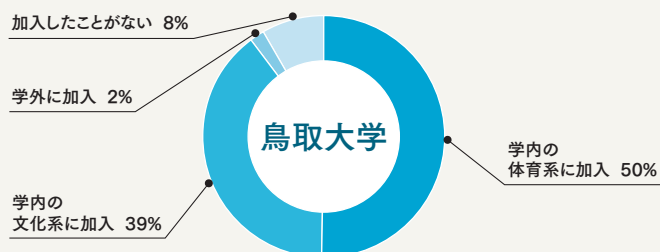
「ひとり暮らし」を通じて、次の3つの「自己管理能力」が修得できます。

- a. 「時間の管理」：睡眠・起床・勉強・家事・課外活動等の時間の配分と活用。
- b. 「お金の管理」：収入面（仕送り+奨学金+アルバイト代等）と支出面（家賃+食費+買物+部活動費等）のやりくり。
- c. 「健康の管理」：食生活・生活リズム・運動・定期的な検診（歯科・眼科等）。

3 協働性・コミュニケーション能力

「ひとり暮らし」では、思いもよらないところで、生活上の「困ったこと」が発生します。その際、支援・協力してくれる存在は「先輩」や「友人」です。地方の生活では、他者と関わる機会が必ずあります。同じ学部学科の同級生、部活動の先輩等と普段から繋がることで、困ったことがあったらお互いに助け合う「協働性」を身につけることができます。また、他者対話し相談することを通じて、コミュニケーション能力を修得することができます。鳥取大学の場合、部活・サークルに加入したことがない学生はわずか8%です。

●鳥取大学生の部活・サークルの加入状況



3 学生の特性



「朱に交われれば赤くなる」。4年間（または6年間）生活をともにする周囲の学生は、大きな影響を与えます。



価値観の異なる多様な学生との出会いこそ大きな財産！

1 全国から集まる

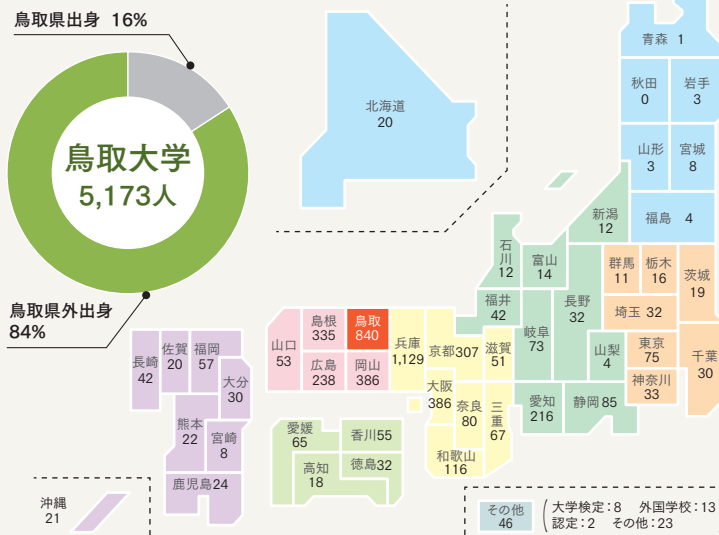
地方の国立大学には、全国各地から学生が入学します。多様な出身地の学生が集まることで、文化や方言が異なる友人と人間関係を構築することができます。同じ出身地の学生しか集まらない大学では学生の同質性が高く、異質性や多様性を受容する能力が養われません。全国の国立大学の中でも特に他県率の高い鳥取大学は、在籍する学部生5,173人中、鳥取県出身者は840人（16%）、鳥取県外出身者が4,333人（84%）です。（鳥取大学2019年4月1日時点）

2 世界から集まる

地方の国立大学には、日本のみならず、海外からも学生が入学します。海外の留学生が日本の地方国立大学を選ぶ理由として、「安全安心な住環境」と「低コストな生活環境」があるようです。“地方”であればアルバイト中心の生活とならず、しっかりと勉強・研究に取り組み、日本の「四季」「ふるさと」を感じられるのも、留学生にとって日本の大きな魅力です。鳥取大学では、中国・韓国・台湾・マレーシア・インドネシア・ブータン・バングラデシュ・エジプト・スーダン・エチオピア・ウガンダ・ケニア・メキシコ等の22の国・地域から164人の留学生が学んでいます。（鳥取大学2019年4月1日時点）

●鳥取大学の都道府県別在籍学生数（学部生）

※2019年4月1日現在 ※聴講生・科目等履修生等を除く
※出身高校の所在地を基に作成 ※編入等で出身高校が不明の場合はその他へ計上



4 教育面



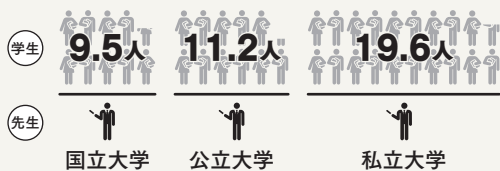
高額な学費を支払う最大の目的は？ 高い教育成果が期待できる教育環境は？



“少人数”で学べる環境が有！

1 教員1人あたりの学生数

国公立大学と私立大学の大きな違いに、“学生の数”と“教員の数”があります。「教員1人あたりの学生数」(令和元年度学校基本調査：学部学生数/本務教員数)をみると、国立大学では9.5人、公立大学では11.2人に対して、私立大学では19.6人です。学生数が膨大な私立大学の場合、30~50人です。国公立大学の場合、少ない学生数に対して多くの教員が配置されています。



私大の約1/2

2 「研究室」や「ゼミ」の実態

教員とともに学生も「研究」に取り組むのが大学です。理系であれば実験・実習を行う「研究室」配属、文系であれば対話・議論を行う「ゼミナール(ゼミ)」配属があります。国公立大学の場合、1~4人の学生が1研究室・ゼミに配属されるケースが多く、個々の学生と教員が対話をしながら協働して研究を行います。「研究室・ゼミの配属学生数=学部3年生の学生数/その学部所属の専任教員数」と想定した場合、鳥取大学の地域学部では約2.9人(184人/63人)、工学部では約3.5人(450人/128人)です。〈鳥取大学2019年5月1日時点〉学生数の多い私立大学ほど、研究室やゼミの配属学生数が多くなる傾向です。

3 講義室(教室)の規模

学生数が多いことのメリットはもちろんありますが、“教育・研究”においては、少人数に越したことはありません。地方の国公立大学にはそもそも大講義室が少なく大人数の授業が少ないのに対して、私立大学では500名以上もの学生が入る大講義室が多数ある大学があります。大講義室での講義は、昔ながらの一方通行の授業にならざるを得ず、アクティブラーニング形式の講義には不向きです。また、建物や施設が豪華絢爛な大学もありますが、“教育・研究”の場所として適切かどうかという観点で、見ていただくことを推奨します。煌びやかな校舎を建て日々運用するには莫大な費用が掛かっています。

5 研究面



大学の醍醐味は「教育」を受けるだけでなく、「研究」ができること。

「研究」を行うことができる大学は？

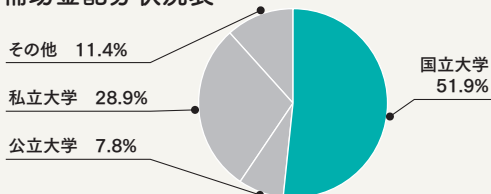


とことん研究できる環境が有！

1 科学研究費助成事業の採択

研究者による科学研究費助成事業(令和元年度)の採択件数を採択者の所属でみると、国立大学51.9%、私立大学28.9%、その他(国立研究開発法人・大学共同利用機関法人・短大・高専等)11.4%、公立大学7.8%です。令和元年度学校基本調査の「本務教員数」をみると私立大学11.0万人(58.4%)、国立大学6.4万人(34.1%)、公立大学1.4万人(7.5%)です。教員数は私立大学がかなり多いですが、科学研究費助成事業の採択件数は国立大学が多いことがわかります。

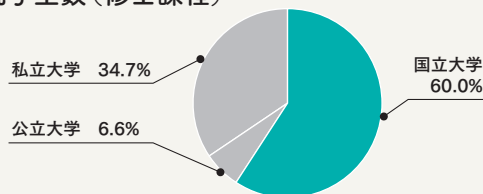
●科学研究費補助金配分状況表



2 大学院の在学生数

学部(学士課程)卒業後、大学院(修士課程)へ進学し研究活動が続けることも進路選択のひとつです。大学院の在学生数(令和元年度学校基本調査)をみると、国立大学は9.5万人(60.0%)、公立大学は1.1万人(6.6%)、私立大学は5.6万人(34.7%)です。学部の学生数とは異なり、大学院在在学生数では国立大学の所属が圧倒的に多いことがわかります。

●大学院学生数(修士課程)



3 施設・設備(特に理系)

国立大学には、人文・社会科学系よりも、自然科学系の工学・理学・農学・医学といった“理系”の学部系統が多くあります。それは研究施設・設備に莫大な予算が必要なため、私立大学ではまかなえず国立大学が担っている側面があります。つまり“理系”の大学進学を考えると、「研究を行うのに必要な施設・設備」は国立大学の方が圧倒的に充実しています。

6 就職面



ひとりひとりの学生を見てくれる 大学はどこでしょうか？



正確な情報を入力しましょう！

1 就職率のトリック

多くの大学が「就職率90～100%」を謳っています。「就職率」とは、あくまで「内定者数／就職希望者数」の数字です。「就職希望者数」とその学生の入学年度の「入学者数」は、どのくらい乖離しているのでしょうか。調べてみると、大きな差がある大学もあるかもしれません。また「就職率」は、あくまで集団の割合を示す数字です。「就職率95%」を例にして考えてみましょう。卒業予定者1,000人のA国立大学だと「50人」が未決定ですが、学生数の多い卒業予定者7,000人のB私立大学では「350人」が未決定です。同じ「就職率95%」でも、実数で捉えると「300人」の差です。高校の生徒数で考えれば、「50人」は約1クラス分ですが、「350人」は約9クラス分です。

2 「丁寧な就職支援」の事実を確認

多くの大学が「丁寧な就職支援」を謳っています。「数多くの就職ガイダンスを開催し個別面談で丁寧に対応」と説明するものの、実際の「ガイダンスの参加者数」や「面談者数」を明らかにしている大学は多くありません。なぜならば、単に「やっている」だけで学生が参加（利用）していないケースがあるからです。鳥取大学では、学部3年生500名（国試と進学者を除く）と博士前期の学生300名、合計800名前後が毎年の就職支援対象の学生数です。例年5月の「就職ウォーミングアップガイダンス」には600～700名、10月の「就職キックオフガイダンス」には500～600名が参加します。個別相談（常駐相談員5名が学生1人1人に対応）の面談件数は年間でのべ4,000～5,000件、学生の利用率は約6割です。またキャリアセンターへの学生の来室率は約9割です。

7 入試



入試を何で 判断していますか？



入試に関する数値を正しく捉えましょう！

1 偏差値のトリック

“国公立大学は偏差値が高い”と思われている方もいるかもしれません。そもそも、受験の「偏差値」は模試会社や予備校がそれぞれ独自に設定しているもので、大学が定めているわけではありませんが、基本的に同じ学問系統であれば、「大学が位置する“地域人口”に比例」する傾向があります。第一志望の受験者数が多い大学・学部ほど偏差値は高くなるため、受験者人口の多い都市部の大学ほど高めで、受験者人口の少ない地方の大学ほど低めです。

2 偏差値の見方

模試会社や予備校がつくる“偏差値表”は、「国公立大学」と「私立大学」で分かれています。それは偏差値を算出する母集団が異なるためです。国公立大学は5教科7科目をベースに算出されますが、私立大学は2・3教科をベースに算出されます。私立大学の方が科目数が少ないことで、高めに出ます。一般入試の合格者が少なく附属高校・指定校からの推薦入学者が多い一部の私立大学では、その傾向が特に顕著です。そのため、同じ【偏差値55】でも、国公立大学と私立大学では数字の意味が異なります。また受験の偏差値は、大学の教育・研究のレベルを示すものではありません。受験の「偏差値」は、過去の受験者の合否結果の参考値以上のことは示しません。

3 倍率のトリック

“国公立大学の倍率は高い”と思われている方もいるかもしれません。センター試験後の新聞に掲載される倍率は「志願倍率」であり、本当の競争倍率を示していません。実際の受験者数に対する合格者数で表したものが「受験倍率」であり、その過去の数値を確認すべきです。受験者数の多い医学科・獣医学科を除けば、国公立大学の一般入試（前期）で極端に高い受験倍率は発生しにくくなっています。

大学の偏差値



その大学・学部合格した
受験者の模試偏差値



都市部ほど受験者数が多く高学力層の受験者も多い傾向

大学が位置する地域の受験者人口によって高低差



「地方の国公立大学」と 「都市部の私立大学」の違いをご存じですか？



国公立大学には、その地に設置された“理由”と“歴史”が有り！

1 地方の 国立大学の場合

国立大学の多くが戦後の教育政策として1949年、新制大学として全国各地で開学しました。その後、大学・学部の新設や、大学間の合併も一部ありました。また公立大学から国立大学へ移管された学部を有する大学もあります。国立大学は、「全国的な高等教育の機会均等の確保」「地域の活性化への貢献」「計画的な人材養成等への対応」のため、全都道府県に設置されていることが大きな特徴です。

2 地方の 公立大学の場合

公立大学は、栃木県・徳島県・鹿児島県を除き全国各地に設置されていますが、長い伝統の大学や比較的新しい大学、総合大学もあれば小規模な単科大学もあります。国立大学がない地域や、その地域で国立大学が学部を有していないがゆえに、“準国立大学”として開学した大学(学部)もあります。近年では、地域に大学が必要不可欠な存在であるとして、地方の私立大学が公立大学へ移管するケースもあります。

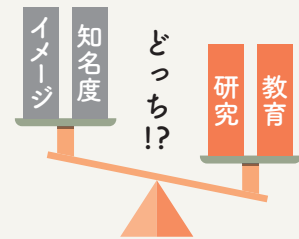
3 地方の国公立大学に 共通すること

全ての国公立大学が同じ歴史や規模を有していません。しかし「地方の国公立大学」に共通する点があります。それは、地域社会(地方自治体・地域住民・産業界等)と国との間で長い議論と協議を経て、苦勞の末ようやく設置された、“その地域にとって待望の大学(学部)”ということです。したがって、大学も学生も、地元の地域から愛され親しまれる存在です。大学が地域社会に根差し繋がっていることが、地方の国公立大学に共通する“特徴”であり“魅力”です。都市部には数多くの私立大学が存在しますが、地域社会から望まれて設置された大学はどれだけあるでしょうか。私立大学は“建学の理念(精神)”が設置の支柱であり、設置背景や経緯が国公立大学と異なります。

9 大学進学の意味



なぜ大学へ 進学させたいですか？



大学進学の意味を再考ください！

1 高校卒業後の 進路は自己選択

令和元年度学校基本調査の高校卒業者の主な進路状況を見ると、保護者が高校生だった約30年前と比べ、高校卒業後の進路選択として「大学・短大進学」を選ぶ者が近年多くなっています。しかし、それでも「大学・短大」進学率は54.8%が最も高い値です。つまり、高校卒業後の進路先として「大学・短大」を選ぶ者は、およそ半数だということです。高校卒業者の全員が、大学に進学するわけではありません。「専門学校」や「就職」の選択肢がある中で、自らの意志をもって自己選択してほしいと願います。

2 大学進学は 大きな買い物

大学進学には莫大な費用がかかるにも関わらず、大学を中身(教育・研究)ではなくイメージや知名度で選んでしまうと、大学進学後に本人にとっても保護者にとっても、大きな損失となりかねません。見栄えではなく、教育・研究の内容についてしっかりと検討した上で選択してほしいと願います。

3 本人の“主体性”が重要

大学進学にあたり「その大学は何をしてくれるか」といった受け身の姿勢は、望ましいものではありません。なぜならば、大学入学してから様々な学生支援や留学の機会があっても、自分から行動しなければ、何も得ることはないからです。受動的な進学ではなく、自分が「何をしたいか」「何をするのか」主体的に考え進学することが今、問われています。

●高等学校卒業者の主な進路状況

